第一部　（手記・外地）

出征・戦後の思い出

阿部　仁

（出征・大陸へ）

「祝出征」の職旗もない赤律だけの僕を囲んで万歳を三唱して、さていよいよ小さな汽車の走る国東線の駅に向かい、この懐しい家を後にした。思えば中国の父のところを出る時のこと。河南省の商丘の駅から徐州に向かう列車に乗り込み、親父の会社の人達や近所の人に見送られて出る時、いつの間にか父も乗り込んでいて「お前足だけは気を付けて手入れをしろよ、よいか足さえ立って歩けるならばたいていのことは出来るぞ」などともう歩兵になるのに決まったようなことを言っている。自分の軍隊の時の経験だろうけれど、もう汽車は出るというのに降りようとしない。駅長は父の友達なのですこしは待ってくれたらしいけれど、見兼ねて会社の人に伝言したのでしょう。二人ほど乗って来て親父さんもう時間だから降りましょう、と抱えるようにして降りて行ったのを思い出した。やっぱり一人息子との別れがたまらなく寂しかったのでしょうか。痩せっぽっちの乙種合格の僕が、父にとっては何となく心配だったのでしょう。これから受けることになるだろう苦労を思ってか、だんだん遠ざかって行く汽車の窓から見た父の目に涙が光っていたような気がする。昔の伍長勤務上等兵だった父には、兵隊の苦労が良くわかっていたのでしょう。やはりここは多分にざわめいた雰囲気で、もうたくさんの人で一杯だ。あちらこちらに人だかりが出来ていて、多分出征兵士の家族のかたまりでしょう。そのほかに小学校の生徒に女学校の生徒が、それぞれ日の丸の旗を持ってかたまっている。そのうち女学生の方から、鼓笛隊の音で八紘一宇の曲が流れ出して、にわかに辺りがざわめきだした。町役場の兵事係りの人が召集兵と現役兵の人は駅に入って下さいと叫んでいる。それではと叔父さんと別れの挨拶をして駅に入ると、召集兵と現役兵は四人と五人で、全部で九人が今日送り出されるらしいことがわかった。我々 現役の者たちはさっさと駅に入ったけれど、召集の人達はまだ改札口で何か話をしている。家族の人との別れは独り者とは違うのだろう。ホームに立っても知っている人は一人もいないし、これが日出町（大分県）ならば多分検査の時に一緒だった人がいて話も出来たでしょうが、僕にはまったくこの町には知る人もない。それでも夏休みには叔父のところに遊びに来ていたので、小さな軽便列車には結構なじみがある。日豊本線の杵築の本駅に着くまでには、満員の時には力が足りなくて、よ

くがたがたと車輪を空回りさせてあえぎあえぎ走っていたのが懐かしい。もうその可愛らしい汽車が迎えに来るであろう。まさかこれが勇ましい門出の列車になろうとは縁とは異なものだ。やがて、この町の在郷軍人の会長であるらしいよぼよぼの海軍中佐が、我々出征兵士の前に立って、何か知らないけれどとにかく立派な軍人として戦ってくるようにとか、後のことは心配するなとか、月並みなことを言っていたようだ。こっちは別に気にもしないで何か他のことを考えていたら、何時の間にか話は終わったようで、敬礼と言われてびっくりして兵隊並みに手を挙げて敬礼していたら、役場の人がそばにきて小さい声で「君挨拶をしてくれないか」と言うので「僕はこの町の者ではないですよ、それに年のいった召集兵の人がいるでしょう」と言ったけれど、田舎の者はこういう時に喋れと言っても駄目なんだよ、それに君は幹部候補だろう。とにかく何でも良いから皆さんに挨拶してくれと言われ、この場合いつまでもぐずぐずしていると、人前でみっともないから挨拶をすることにした。陛下の赤子として恥ずかしくない働きをして来ます、なんて格好の良いことを言ったような気がする。それから中佐の音頭で万歳の三唱があり、後は何やら勇ましい軍歌を歌いながら汽車の来るのを待っていた。ホームの端っこには、召集兵がその奥さんらしい人と何やら話していたのが印象に残っている。やがて軽便列車がピイポウとのどかな汽笛を鳴らしながら入って来たので、ようやくこの何とも言いようもないお別れの儀式を終り、一人になることが出来た。

君生きて帰れと祈り　黒髪を神に捧げて送り来しひと

召集の人の奥さんはさぞかしこのようにして送りに来たであろうと思い、何となくあの奥さんの髪の毛が、異常に短かったような気がしたのは思い過ぎか。

（八月十五日、戦闘停止命令）

中国での軍隊生活も終盤、八月に入り、ソ連の参戦を聞いた時に覚悟が出来ていた。部隊長から週番士官以外の全将校の会食をするから将校当番に材料を調達してくれ、と連絡を受けた時には、これでいよいよだなあと思った。やはり八月十五日に、総軍から別命あるまで戦闘は中止せよとの命令があり、ただちに各中隊長以下将校全員集合、の命令が出た時にはショックでした。いよいよ終戦である。敗戦であることは言うまでもなくわかっているが、どういうかたちになるかはまだわからない。支那派遣軍としては負けてはいないのだ。ようすがわかるまでは現状のまま待機していなければならない。これからが大変である。なぜならば我が部隊はまったくの前線で、部隊の展開している前は、もちろん中国軍もすきがあれば長沙を奪回して、出来れば洞庭湖の線までは押し上

がろうと相当の部隊を展開している。戦闘を停止しろと言われても、向こうから攻めてきたらどうなるか？　その件で、将校会議では問題になったが、とにかく仕掛けられたら白旗を挙げて軍使を出し、話合いで休戦を申し込むしかない、ということになり、司令部に指示を受けるため急拠部隊長自身が司令部に打合せに行った。結局我が十大隊に前線指揮所を置き、さしあたり相手の出様に対応することとなり、司令部の参謀と連絡を取りながら対応することになった。自分は当面参謀部付き通訳を兼ねて前線指揮所の通訳を命じられた。いよいよこっちの出番が来たようだ、とその時は覚悟戦を新たにしたが、それが復員まで続くとは、そして大変な責任を背負うとは、その時点で微は知る由もありませんでした。

一歩一歩、諸々の思いを残した土地を離れるにつけ、短い間ではありましたが、私の生涯にまたとない経験と、人としての生き方をたくさん勉強いたしました。父たる国は日本、そして私の人間形成を学んだのは母に等しい中国である、と戦後五十年近くなった今でもその思いに変わりはありません。米泥棒の親子を助けた時。武装解除の時の通訳としての何とも言えないやるせなさ。収容地での思わぬ人々の親切。中国に骨を埋めるつもりだったのが、運命の悪戯か敵として戦いに来ることになり、そして戦が終わり今度は捕虜となり抑留される。言葉が分かるお蔭で重宝がられ、同年兵より遥かに優遇されたけれども、その分、しなくてもよい苦労もしました。しかし、考えようによっては、あと二、三か月終戦が遅れたらば、我々の部隊は確実に一個中隊づつ捨て石のように後衛しながら、命からがら岳州の線まで後退して、運よく残った部隊は北支にいるまだ使える戦闘部隊と交替する運命にあった。装備のよい部隊は、満州に取り急いで回さなければソ連のようすがおかしい、また満州にはソ連と戦えるような軍隊はほとんどなかったのでは、と聞いていました。

帰国に際して、やっと借り物のＬＳＴ（米軍の上陸用舟艇）であろうとも、日の丸を掲げた船に乗れた。正に日本そのものである。やれやれ随分長いことこの日を待ったものだ。さらば中国の地よ、本当にさらばである。万感こもごも、この気持は多分僕一人ではないであろうが、僕は言いたい。中国の人よ、いろいろ助けてくれたたくさんの友達よ、再見再見。今日の別離は何時の日か再び逢うことが出来るであろうか、平和の戻った日にまた来て、過ぎた日のこと等お礼を言いたいものだ。本当に有難うございました。さようなら中国大陸。

美しい花は常に咲かず、美しい景色は常に無し。今育別れて何時の日かまた逢わん。

かの何日君再来の歌詞のごとく別れというものは辛く寂しいものである。私を育んでくれた母にも似たる中国の地よ、さようなら。

（帰国）

佐世保で十日余も上陸を待ちそれからすぐに、夢にまで見た帰還船に乗り込みましたが、喫水の浅いＬＳＴで黄海に出たら、もう木の葉のように揺れて、甲板に座わって見上げたマストがくるくる輪を描いているみたい。さて、我々はどこまでついていないのか。一緒に乗った最後の野戦病院の患者のうちの何人か伝染病の患者がいて、船の中で死んだのがいたらしく、章検疫のためその順番を待つために十日以上上陸が出来なかった。食料の予定が狂ってしまい、食いのばしのために初めに出してくれた飯の量の半分ぐらいしか出してくれない。何もすることがなく、ただ食べるだけの毎日だからたまったものではない。皆青い顔をして「腹が減ったのう、外交官何とかならんか」と、しまいには主計や軍医までが夜中に来て泣き言をいう。海の上ではどうにもならない。おまけにアメリカさんからの借船だ。こればっかりは私でもしょうがない。全ては終った。四日ぐらい乗っているのには、そう困らないが、定員の四倍近く乗せて、しかも十日以上も補給もなしに佐世保の港の中に足留めされているのだから、たまったもんではない。当然食べるものは一日一合そこそこで、一食分を一日食で食べる状態だから、まさに飢餓地獄でした。六月の港の中のしかも狭い船内は、蒸し風呂のようであるが、甲板に出るとこれまた暑い。太陽が沈むのを待って、それぞれ甲板に這い出して涼を取りながら、せっかくの美しい祖国の夜空を見上げるゆとりもないのか、車座になって話しているのは食い物のことばかり。「白い飯ならおかずはいらないよなあ。味噌汁に糠床壷から取り出した糠漬けでもあれば御馳走だよ。上陸して町に出られたら寿司も食いたいなあ。贅沢は言わないからせめて汁粉の一杯もその辺にないかなあ」と寄ると触るとよだれの出るような話ばかり。

そのうち空腹と無卿に飽きた兵達は、次第にいらいらし出して、些細なことで喧嘩をするものも出てきた。困ったのは我々の部隊ではあまり見掛けなかったけれど、他所の部隊では戦争中に苛められた者が、もう軍隊ではない集団として生活をしているうちに（上海で乗船する時に士官も下士官も皆階級章をはずされた）、前の恨みを思い出して兵隊が集まってリンチをし出した。そのため何か不穏な空気が船一杯に漂ってきたようだ。鬱憤のやり場がないのでこうなったと思うけれど、誰にも止めようもない有様でした。下手に上官ぶって顔を出すと「何を、貴様。誰が偉そうな顔をしろと言った」と食いつかれるのが落ちだ。最後に及んで嫌なことになったなあ、と心配していたけれど、ようやく大事になる前に上海を出てから十三日目に上陸許可が出て、この監獄みたいな船から降りることが出来た。再び踏めることはないと思った大地に足が着いた時に、ようやく恩も恨みもないもの同士とし

て「良かったなあ」と手を握り合ったものでした。全ては終わったのです。ただ胸に熱いものが溢れるばかりでした。そして元海兵団の兵合に着いて見た日本の地図は、丸焼けの山河であった。

戦いの犠牲となった亡き人達のご冥福を祈りつつ

中国　戦時下の吉林省

第一部（手記・外地）

外地での終戦

伊藤　治代子

その日は、おだやかな日でした。内地では、毎日空襲があり、食べる物もなく、サイパン、アッツのことなど、激戦の話は、ささやかれていました。満州では、爆撃もなく、この戦かいは、最後には勝つと、信じていましたので、子供心にも、なんの心配もしていませんでした。

終戦の前夜に、ものすごい音と共に、外が明るくなり、昼よりも明るくなり、あわてて外に出ると、空に火の玉のようなものが、三個まわりを照らしていました。あとでそれは、爆弾ではなく、照明弾（しょうめいだん）と言うものだという事が、わかりました。照明弾が、三個、私たちの住む吉林に落とされたのです。その時に、ソビエトが、日本に宣戦布告した事を、ラジオで知りました。一戦もなく、ソビエトは、戦勝国として満州（日本）に、乗り込んで来ました。

私は、吉林といっても、市外の"りゅうたん"と呼ばれたところに、住んでいました。"りゅうたん"は、電化村ともよばれ、そこに住む人は、みんな同じ会社につとめていました。私の叔父は、その会社にいました。私の父は"しんきょう"に

いましたので、まずは、父の所に向かいました。私の家族と叔父の家族は、中国人にまぎれて、やっと汽車にのり、父のもとにつきました。私たちは、日本に引きあげる日を、日本人会の方たちと共に、待ちました。心待ちして、明日、列車に乗れるという日に、父は、中国の公安の人に連れていかれました。父は、どこに連れていかれたのか、どこにいるのかも、わかりません。明日、列車に乗らなければ、いつ日本に帰れるかわかりません。”しんきょう“から、船に乗るところまでは、何日も汽車に乗っていかなければ、行けません。どうしたらいいのか、私たちは、途方にくれましたが、明日、日本人会の方たちと、列車にのらないと、日本に帰るチャンスは、二度とないと思い、泣く泣く乗ることにしました。汽車は、無外車、木材を乗せて運ぶものなので、日本人会の方たちが、人が落ちないように、まわりに板をはりつけ、ようやく乗れました。

座るのがやっとで、自分のリュックサックの上に座り、そのままの形で、朝になりました。トイレは、ありません。畑の中に汽車を止め、そこで用をたします。いつ、襲われるかわかりませんので、すぐ汽車に乗らなければ危険です。夜、投石があり、汽車が襲われました。その為、汽車は、スピードを出し、みんなは、身をかたくし、身動きもせず、走る汽車の中で、朝まですごしました。やっと明るくなり、汽車が止まり、降りる許可がでました。みんなは、外に出て用をたし、ほっとしました。そして、夕べの襲撃で、運転手さんが怪我をし、それでも汽車を止めずに走らせ、なんとか危機を、のりこえたことを、知ったのです。でも、いつまでも止まっていては、危険です。あわただしく、出発です。

その夜は、雨になってしまいました。雨に打たれ、頭や首すじなど、体をふきました。その内に、太陽がさしてきて、走る風と、日の光で、ぬれた体も少し、かわきました。日の光は、ありがたいものです。そして、その夜とまるところに、つきました。汽車を降りた私たちは、長い道をゾロゾロと、引率されて進みました。先には、軍の馬小屋だった建物が、いくつか並んでいました。今夜は、そこでとまりです。馬小屋には、屋根がついていました。明日、汽車で出発し、船に乗るとのことでした。私たちは、リュックサックにまいて運んできた毛布にくるまり、土間のすみで、一晩をすごしました。次の日、コロ島まで汽車で行き、港に着きました。港には、大きな船が着いていました。みんな、もくもくと、さんばしを渡りました。そして、貨物船の船底に、一人分の場所を、割り当てられたのです。ホッとしました。これで、やっと日本に、帰ることができるのです。

食事は、朝は、コウリャンのご飯一杯に、塩の味の汁！
昼はカンパン八枚！　夜も、朝と同じで、コウリャンのご飯

一杯に、塩の味の汁でした。私は、船酔いで、なにも喉を通りません。ようやく、博多の港に着いたのですが、まわりの船でコレラがでた為、それから一週間も上陸できず、又、船酔いに、苦しめられました。十月二日、やっと、船から、博多の港に上陸しました。日本の方たちの、あたたかいお迎えが、待っていました。炊き込みご飯のオムスビが、一人に一個くばられました。その温かいオムスビの味は、いまでも、忘れることは出来ません。今まで、こんなに〝おいしい〟と思ったものは、有りません。あの時、博多でいただいたオムスビは、私の一生の〝ゴチソウ〟です。

戦前の大連（中国）港の埠頭

第一部（手記・銃後）

敗戦日によせて

花田　裕子

（からたちの花――兄のこと）

「お兄さまは、”からたちの花“が大好きでいらっしゃいました。教会のピアノで私が弾いたり、ご自分で弾いてうたったり、それはそれはたのしい時間を、過ごさせて頂きました。」その手紙は、そのようにいつも、綿々と綴られてありました。その女性は、東京の音楽学校を出て、満州の学校で、音楽の教師をしていたそうで、教会で親しくなったそうです。九州の耶馬溪の出身で、美那子と名乗っていました。私は何度か、父の許へ送られて来たその手紙を、母と姉が、密かに開けているのを知っていました。その後来た手紙には、「特攻隊で出られた機影を、いつまでも見送りました。あけがたの月光のなかに、編隊を組んで飛び去って行く！　見えなくなってもその爆音が、耳の底に残っておりました。」その文章は、まるで目の前に見えるように書かれてありました。私たちは、殊に父はがっかりしたようでした。

兄は、昭和十八年十二月、学徒出陣で、始めは市川の砲兵隊、そして、那須の航空訓練を経て、満州へと出立いたしました。私は、まだ小学生でしたし、その次の移動というのは、余り知らさせませんし、まして、むしろ軍事秘密ということだったと思いますので、よく判りません。それに兄は、音楽が好きで、小さい時からピアノを弾き、私たちも合唱したりしましたし、スポーツも、柔道、剣道から野球、乗馬まで何でもござれで、好きなことをしていましたが、無口な人でしたから、私は何にも聞いておりませんのが、今になると残念に思います。

私の一家はその時、疎開しておりまして、手紙も、終戦後新築した家の方へ送られて来ました。父は、兄を待つ切々とした詩を、日記帳に書きつけていました。

ところが、新聞に出ておりました。兄が第一船で帰ることが報じられたのです。父の喜んだ姿は申すまでもなく瞼に焼きついております。しかしその後、どんな事情か、一ヶ月以上も船が出なかったそうで、兄は、ここまで来てと思いつつ諦めかけたそうですが、やっと出た時は、本当に夢のような想いだったそうです。その時の潮焼けで、真っ黒な顔で帰って来ました。

満州で終戦となり、ソ連のために連行され、マルシャンスク（バイカル湖のほとり）までいったそうです。過酷な条件で、随分辛い目にも遭ったようで、”働かざるものは、食うべ

からず“と、人が変わったようにいうのに、びっくりしました。只、将官は、割合待遇はよかったそうで、法律、語学が得意だったのも幸いしたのではなかったかなとは思います。終戦のどさくさに、あまり威張っていた人は、後ろから撃たれて、殺されたこともあったそうです。神経質で、食事もうるさかったのに、余り我が儘もいわなくなったけれど、その代わり、お酒が非常に強くなり、それが、やはりがんにもなり、髪も真っ黒でふさふさとし、全部自分の歯で虫歯もなく、湯上りのような顔色で、七十の命を終えてしまいました（スキル性胃がん）。

その母は、華族様の行儀見習と家庭教師をしていたこと、中野の駅前に、父と結婚して、赤い屋根の二階建てのモダンな家を建てたこと、水郷の実家へ兄と里帰りした時も、町中の人に、紋付・羽織袴で、出迎えられたこと、よそでお風呂に入っても、必ず人を呼んで背中を流させたこと、腹膜炎で亡くなったこと、”天然の美“を朗々とうたいおさめて息をひきとったことなど、父やまわりの人から聞かされました。その人は亡くなる時、私が死んだら妹（私の母）に、是非あとを託すようにと言い残し、私の母は、実家の階段のかげで”あんな年の離れた人(十四才)のところに、いくのはいや“と、よく泣いていたそうです。兄は、母親のお棺が出ていくと、”お母ちゃん“と、後を追っていったそうで、そのいたいけな姿にみんな、又、涙を流したそうです。兄は、特攻の時不時着を三度したそうで、死ぬまで”落ちる、落ちる“という夢で、よくうなされたそうですから、幼い日、若い日の出来事は、心の深層に刻みこまれているのでしょう。”からたちのうた“の、みんな優しかったという言葉は、兄にとっての、母恋のうたなのでしょう。

外地にいった人たちも大変だったでしょうが、内地にいても、いろいろなことがありました。成増の飛行場が出来て、六年生の時、地ならしのため、狩り出されました。その日、妹が生まれ、その時の作文が、文集にのりました。疎開して、家までの遠い道のりを歩き、機銃掃射にもあい、稲束を干してある田んぼに飛び込み、土手にはりつきました。何回も、執拗に、艦載機が頭の上を廻り、その弾丸が国道にあたると、”ビシビシ“、川だと”ブスッブスッ“という音がきこえました。東京の空襲を終え、その帰り、警戒警報になるので、その為に私たちは、警戒心を解いた後、被害にあって亡くなった人もいたようです。

食糧事情は、戦中、戦後、逼迫を極め、夫は出征し、子を抱いて毎日、兄の無能、兄嫁の冷酷、横暴を、泣きながら訴えている人もいました。でも、皆似たような状態でした。只、我が母は、勝気で才覚のある人だったので、家の米びつはいつも、米が溢れていた時もありましたが、食べ盛りの弟たち

もおり、大変でしたでしょう。車、銃が増え、瞬く間にアメリカ化されていきました。日本にも、日本の良さがあったと思うのですが、戦争を知らない世代に、戦争の辛さや悲惨さを、いくら声を大にしても通じないかもしれません。でも、戦争というのは、絶対いやです。地球のどこかで戦争があり、それを勝つために手段を選ばず、いろいろな薬品や爆弾を使い殺されていく現実は悲しいことです。

私も、夫の父に将来の不安を訴えられ（余り障害者のことを知りませんでした）、私の夫は、重度の障害者であった為に、様々なことをいわれました。子供たちも「障害者の子は、乞食の子」とさげすまれ、辛い想いをいたしました。でも、子どもたちは、じっと、我慢してくれました。素直で、やさしい子どもたちに、育ちました。障害者だって、誰でも同じ人間です。"たたかい"は、いつまで続くのでしょうか。

パン購入券

衣料切符

第一部　（手記・銃後）

忘れられない「銃後」

山名　茂登

先ごろ、『戦艦大和』という映画が、各地の映画館で上映され、話題を呼びました。製造の経緯から、その目的を果たすこと無く沈没してしまうまでの貴重な記録映画でしたが、反面、「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」という、戦略の第一歩を、知らなかった？としか思えないようなお話でした。考えてみると、敗戦前の日本の基礎教育は、明治時代から一貫して「忠君愛国」を旗印にした、覇権主義の、軍国教育でしたから、「負ける場合の想定」等、全く無かったのでしょう。

個人的な話になりますが、私の戦争への認識の始めは、昭和七年、小学生の時、学芸会で「満州（国）独立守備隊の唄」を四年生全員で、斉唱した時からです。その後、数年間は、軍需景気の裏付けもあって、小学校でも、女学校でも、前線の兵隊さんに慰問袋を贈ったり、慰問文を出したり、時には、赤十字病院に紙芝居等を持って行き、戦場や、病に倒れ入院中の兵士の慰問に行った等のこともありました。又、中国の

主要都市、上海や南京の陥落の報に、大喜びして、町内会の提灯行列に参加（宮城前まで歩き、万歳、万歳、万歳と叫ぶ）した記憶も……。他方では「満州国」が出来上がり、日本が唱える「王道楽土」の思想に共鳴して、周りの様々な人が、「満州」に渡って行きました。しかし、戦勝気分もその辺りまでで、昭和十四年、女学校の卒業間近には、学校の教室で「白衣」（傷病兵が入院時に着る）を縫い、戦いの緊張感が、肌に迫って来たのでした。

その頃から?日本は、「大東亜共栄圏」をうたい、中国のみか東南アジアにも、戦線を広げて行きつつありましたが、同盟国のドイツ、イタリアの旗色が悪くなり、加えて日本の進出に危機を感じた、英、米、中、和（ＡＢＣＤライン）が、反撃を開始し、たちまち、物資や人の不足が起こりました。まず第一は兵員の不足で、それまでは「丙種合格」で、召集の対象にしなかった人や、三十才以上の家族持ちの人にも召集令状が出され、昭和十八年十月には、第一陣の学徒動員として、大学在学中の文学部の学生が召集され、続いて、理工学部その他の学生も、殆ど全て出征して行ったのです。果ては、軍需工場その他で働いていた人々にも召集が掛かり、職場の人手不足を補うために、女性にも軍需工場への徴用が掛かりました。徴用には、成人のみか中学生まで動員され、学校や職場でも、学業どころではなく、働いたのでした。

物資の方も、まず始めは、軍具を作る鉄が不足という事で、家にある鍋、釜、鉄瓶や火鉢、看板、遂には、お寺の大事な釣鐘等まで、供出させられたのです（当時は、応じないと「非国民」のレッテルを、貼られるような空気がありました）。食糧も、主食の米を始め、いろいろな食べ物が不足し始め、国は、「統制経済制」を打ち出しました。食糧に限らず、殆どすべての物が、個人の自由にはならず、「物価統制令」の下に、配分されることになりました。そして、その実施の一番の被害者は、多分、町内会の役員ではなかったかと思います。その頃から父は、町内会長を務め始めたのでしたが、それまでの町会は、地域ごとに氏神様の祭礼行事や親睦行事を催す、単なる親睦団体でした。それが、行政からの強制的依頼で、にわかに、住民の確定やら、食糧等物資配分の最前線に立たされたのです。勿論、そのための事務員費は行政から出されましたが、住民の確定を基本に、大事な米穀通帳の配布や、殆どの日用品に必要な切符制度の配分に、気配り、目配りも大変だったと思います。

一方、当時我が家は、父が活版印刷業を経営していましたが、それも、紙、インク等の資材不足が深刻になり、終いには、企業整備という事で、個人営業は許されなくなって、ブロックの内の、比較的大きな会社に勤める事になりました。そのうち、父が昭和九年に新築の工場兼住居に据えた自慢の

活版印刷機も、いつに間にやら運び去られ、後に父に、「あの機械は何処に行ったの？」と聞きましたが、「満州に行ったようだよ」と答えたきり、何も言わなかった父の寂しそうな顔は、忘れられません。

話は前後しますが、ミッドウェイ海戦での敗退も知らず、大本営の「勝った、勝った」の発表を、信じ続けていた私達も、昭和十七年四月に、米軍艦載機が突如、私達の町の上空（比較的低空）を、機銃を発射しながら飛びぬけて行き、通りに居た町の人々が、一斉に家に駆け込んだ一幕がありました。その後、町会役員は全部「警防団員」とされ、所轄署の三田警察から指導の巡査部長が「防空訓練」の指導に来たり、定期的な訓練が、始まったのです。しかし、男性はもとより、若い女性も大半は徴用され、残っているのは、五十才（その当時は、人生僅か五十年でした）以上の人ばかりで、病気で入院がちな母と、多忙な父と、妹達の関係で徴用されず残っていた私は、その訓練に参加していましたが、「とてもこんな訓練では、被害は防げない」と考え、父に進言し、それぞれの事情で、まだ家に残っていた二十才代の女性に呼び掛けて、「防空訓練の会」を結成、町会の訓練や実際の空襲の時、さきがけて働ける特訓を始めたのです。週二回夜間、三十人の仲間を三つに分けて消火、救護、毒ガス防除と交互に学びながら、皆一生懸命やりました。しかし実際はどうだったか……、空しい思いが残っています。思い出はまだ沢山ありますが、最後に一つ、当時体験した思い掛けないお話をしておきます。

敗戦の一年余り前、当時、毎日新聞の外部団体として「生活科学化協会」があり、その会の主催で、各地で徴用され、寄宿舎生活をしている女性の為に、舎監とか、寮母の養成講座が開かれ、私も申し込んで、三ヶ月の講習を受けたのですが、その終了時に目的が変わり、最初の修了生は、全国に「製塩技術（当時塩は専売品）の指導」に出張、二回目は、ひっ迫している食糧の補助に「どんぐりの製粉法」を教える傍ら、どんぐりを集めて、東京に送るお願いの講師に応募しました。二十年九月、まだ進駐軍も駐留し始めの時、青森県に出張しました。毎日新聞青森支局からの手配で、二人ずつ三班に分かれ、私は五所川原、大鰐、深浦等の「母の会」を頼りに廻り、講習会を開いたのです。しかし、何処でも、「どんぐりの製粉より、小麦粉でふかしパンを作る方法（うちでは、始終代用食で作っていた）を教えて」と言われました。そしてある時、参加者の一人が言いました。「東京では、普通は拾いもしない、どんぐりまで食べるのか。青森では、馬が白米食って、脚気になった話もあるのに」。ショックでした。

第一部　（手記・空襲）

戦争の記憶

赤星　タミ

甚だ乱筆でございますが、一筆記させて頂きます。

B29には、度々出会いましたが、山の木などで、命を取り止めました。次は、芦並（？）の水俣での事でございます。

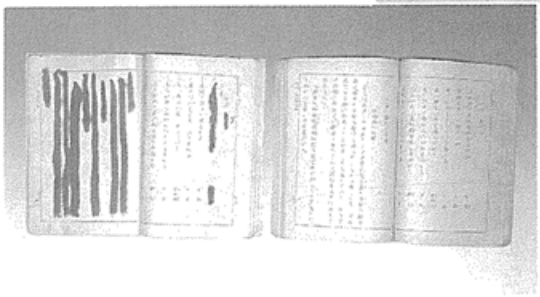
丁度お昼の時に、屋根の上にパラーパラと音が致しました。皆で、雨かなあ、と思った途端に屋根が真っ赤になり、燃えてしまいました。（指の？）ような焼夷弾だったのでございます。あわてて、前の畑の土手の防空壕に逃げました。

当時は、着る物も、食べる物も、筆やペンに著せないようなものでございます。まだ他にも一杯ございますが、私も九十三才の老人になりましたので、記憶もうすれました。が、どうして、戦争なんか国は、しましたのでしょうね。

B29の時は、炭鉱で働いていました。鉄を作るためだったのでしょう、真っ黒の顔になり、食べものも、着物も虫だらけでした。若さでもったのでしょうね。弟は当時二十三才で、熊本歩兵から出陣いたしました。（ノモンハンで？）特攻隊として散りました。年は二十四才だったと思います。

戦争より、つまらないものは、ないですね。簡単でございますが、乱筆を、とどけさせて頂きます。

昭和館


戦後スミで消した教科書／昭和館

我が戦災手記

伊崎　紀八郎

（東京大空襲体験記）

ハワイパールハーバー攻撃で始まった太平洋戦争は、最初は勝っていたのですが、ミッドウエイ海戦あたりから旗色が悪くなってきました。この海戦で航空母艦四隻を失いましたが、大本営は発表しませんでした。昭和十九年夏、マリアナ諸島サイパン島に米軍は上陸してきました。我が守備隊は交戦しましたが、全滅してしまいました。玉砕と言っていました。このとき在留邦人は捕虜になるのを拒んで崖から身を投げて亡くなりました。

その後米軍はグアム、テニヤン、など周辺の島々を占領し、B29の発進基地を作りました。

昭和二十年三月九日グアム島に司令部を置く、第二十航空軍所属B29第二十一爆撃集団司令官カーチス・ルメイ少将は東京空襲を命令し、午後五時十五分三百二十五機のB29がサイパン・テニヤンの基地を発進し、房総半島から東京に侵入し、三月十日午前〇時七分から二十三時間の間に焼夷弾、ナパーム弾千六百六十五トンを投下。その攻撃対象は、隅田川を中心に浅草区、下谷区、本所区、深川区、城東区、その周辺の下町地区でした。私たちはその頃、浅草区千束町に住んでいました。親子四人で家財を車に積んで言問橋を渡って避難しました。橋の上は荷物と人で身動き出来ない有様でした。橋を渡りかけて牛島神社の脇まで来たところ、橋の上で荷物に火が着き火災が発生しました。直ぐに荷物を捨てて橋の脇の公園に逃げ込み危うく助かりました。

三月十日朝、橋の上は焼死体と焼けた車などの残骸で足の踏み場も無い有様でした。橋の上は五千人の死者だったそうです。日本橋浜町の明治座では三千人の死者があったそうです。又、言問橋から隅田川に飛び込んで溺死した人もかなりいたようです。何しろこの二、三時間の間に十万の亡くなった人が出たとされています。死体は火葬できないので、公園に仮埋葬し、二、三年後火葬して墨田区の東京都慰霊堂に納めました。

その後B29は東京の各地を爆撃し、東京を廃墟としてしまいました。又、地方都市も爆撃しすっかり焼き払いました。そして、広島・長崎に原爆攻撃をし、八月十五日に戦争は終わりました。

（戦災に思う事）

今、墨田区の江戸東京博物館の構内には言問橋の焼けた欄

干と、橋の土台が展示されています。その晩我が家では全員無事でしたが、父は四月十三日急性肺炎で死にました。この東京大空襲で言えることは、それだけの大災害に対し国は何も手当をしなかったこと、何処で死んだかわからなかった遺族が多数いたということ、東京都は慰霊堂の脇に慰霊モニュメントを造っただけです。軍人、軍属には手当をしていますが、一般の戦災死者には何も手当しなかったことです。不公平だと思います。

市街地を無差別爆撃した事について米軍は、家内工業が密集して軍需工場化しており、爆撃した事は違反では無いと言い訳しています。

毎日新聞

第一部　（手記・空襲）

昭和二十年五月二十六日朝のこと

井上　繁

東京大空襲というと殆どすべての方が思いだされるのは三月十日。一夜のうちに十万人近くもの方が命を失いました。ところが港区など都心部が大きな被害を受けたのは五月二十五日から二十六日にかけての空襲です。「東京空襲を記録する会」が編集した東京空襲日誌によれば、その日来襲した米軍機の数は五百二機とあります。その日の空襲がいかに激しいものであったかはこの機数から十分察しがつくことと思います。

B29の編隊は、次から次へとやってきました。私が暮らしていた新橋田村町界隈は、それまでの空襲でおおかた焼かれてましたから、もはや焼夷弾が落とされるようなことはありませんでした。夜が明けると昨夜の空襲では、麹町から赤坂そして青山にかけてがほぼ全滅との話が伝わってきました。四月に中学生になったばかりの私が入学した学校は、その方面にありましたから、恐らく焼けてしまったに違いない。授業の有無はともかく一応学校に行ってみようと家を出て、登

校の途中虎の門や霞ヶ関あたりはどんな様子か見ながら行こうと、西久保巴町から大倉集古館脇を経て斜めに溜池へと抜けるいつもの通学路ではなく、巴町から虎ノ門へと歩を進めました。虎ノ門の交差点を曲がり、現在外堀通りと呼ばれる道路に出たとき、目に入ってきたのは、溜池方面から歩いて来る異様な姿の人の群れ。うつろな顔、その顔や手足は煤け、身にまとっている衣類は汚れたり破れたりしていて、履物にしても履いている人は少ない。何人かまとまって来るのは家族かそれとも近所の人同士であろうか。だが誰もが無言のまま。煙で目がやられたとみえて布で目の周りを鉢巻状に覆い手を引かれて来る人も多い。途切れることなく続くそれらの人々とは溜池を過ぎて学校への脇道に入るところで別れました。

学校は校舎の半分近くと体育館とが焼け落ち、校庭の真ん中に当日宿直されていた体育の先生がひとりぽつんと立っておられました。先生に言葉をおかけしたあと暫らく留まっていたものの登校してくる者は全くない。同級生は赤坂見附方面から来る者が多いので、そちらに行けば誰かに出会えるかもしれないとその方角への坂へと回る。坂を下りながら向かい側（青山方面）を見れば見渡す限り焼け野原！坂を下り終えて外堀通りに出ると、二十体ほどの焼死体が路上のあちらこちらに転がっていました。そのうちの何体かは広い通りの真ん中でありながら、どうしてこんなにまで真っ黒に焼け焦げてしまったのか不思議でいたところ、弁慶橋の方へ逃げて助かったという方が、「振り返って見たら、炎が道の両側から中心に向かって地面を横に這ってるんだ。何たって凄い熱でね。だから、地面近くの空気が上に上がってきっと真空状態になっているんだね、地を這う炎の勢いときたら凄かった」と話されていたのを耳にして納得したのでした。

半焼けの畳の下に横たわっていた遺体がありました。畳は炎から身を守ろうと背負ったのでしょう。何人かが覗き込んでいたので私も覗いてみようかと思った途端、誰かがその畳を持ち上げたのです。生の部分と焼け焦げた部分とが半々の男性の遺体が目に飛び込んできました。

戦争体験を振り返って
学童集団疎開の思い出

大倉　雄吉

私にも空襲体験の思い出はいろいろあるが、私にとって東京大空襲は人生のひとつの分岐点でもあった。というのは、学童集団疎開出発当日の朝が父親との最後の日となってしまったことである。これも戦争の宿命というものであろうか……。幸いと言おうか、学童集団疎開をした六年生の後半約七か月の間に、生家と何通かの手紙のやり取りをしている。私の東京の家族宛の手紙は戦災で家を焼かれた際、焼失したらしいが、母および兄弟等の手紙の何通かは古びたまま私の手元にあり、父も私からの手紙を読んで喜んでくれたようである。これらの手紙から東京の戦時中の被災の様子が今もなお生々しく感じ取れる。

疎開先の私宛の手紙を改めて通読して思うことは、文章のはしはしに、戦時中、毎晩空襲に見舞われていた非常時に、母を初め、兄弟達が慣れない疎開先で暮らす末っ子の健康と日常生活を思いやり、また、東京の様子を克明に知らせてくれた家族の愛情を改めて、ひしと感じたことである。手紙の内容は別資料のとおりであるが、戦時中の東京の状況および疎開先の様子の一端を改めて振り返ることができる。

戦況も日本にとってますます厳しくなり、昭和十九年三月決定の「一般疎開促進要項」により、十九年八月から学童疎開が開始された。対象は三年生から六年生までの男女学童である。出発日は忘れたが、八月末頃の当日、私たちは愛宕国民学校に集合、大勢の家族に見送られて不安の面持ちで上野駅から疎開先となる栃木県宝積寺に向けて出発をした。宝積寺駅で三班に分かれ、それぞれが別の滞在先へと向かった。我々の班が割り当てられたのはある旧家であった。疎開先では、地元の人たちに暖かく迎えられ、疎開生活が始まった。何しろ集団生活は皆初めてで、二十畳ぐらいの畳の部屋数室に男女に別れて寝起きをし、学校生活は地元の子と同じ教室で、最初は戸惑ったが、すぐに慣れて仲のよい友達もできた。食事は長い配膳台の前に正座をしてとった。食事の内容は忘れたが、割合十分に食べられたと記憶している。今から振り返ると、食事を毎日作ってくれた方々および寮母さん先生方のご苦労は大変なものだったでしょう。改めて感謝いたしたい。食事といえば、正月、疎開児童の生活ぶりを視察に見えた国民学校の先生方が、皆といっしょに食事をとった際、どんぶりのお雑煮を子供が未だ熱くて食べられないうちに食べてしまったのを見て、ああ、東京の人はお腹が空いているのだなあ、と驚いた。

冬の寒い夜、仲のよい同学年の子と二人分の敷布団を敷き、掛布団を合わせて掛けて寝たものだが、夜中に暑くて汗をかき目が覚めてしまったこともあった。家族との面会日は数回あっただろうか、父が病気のため母は来られず、長兄が訪れた。面会といえば家庭の事情で一度も面会の機会のなかった四年生の男子が、面会のある度に何時も泣きじゃくって寮母さんに慰められていたのが忘れられない。

秋に向かい課外活動として、地元の農家の稲の取り入れの手伝いをした。上半身裸で、地元の子に〝疎開は足を刈るなよ〟と冷やかされ、それでも稲を束ねて、背中をチクチクさせて稲むらに積み上げた。刈り入れの作業の後、農家の広い庭先で長い飯台を並べ皆で味噌汁、ふかしたサツマイモをご馳走になったことも忘れられない。この稲刈り経験は、翌二十年五月二十五日の東京最後の大空襲で家を焼かれ、世話になった縁故疎開先の農家の稲刈りの手伝いの際に大いに役立った。また、冬には霜柱が立ち、雪に覆われた那須、日光の山々を仰ぎ見ての小学校まで数キロの通学路は、足の指の崩れた霜焼けが歩く度に堅い霜柱に当たり、痛く、我慢をして学校に通ったものである。地元の村長、助役、先生が我が母校に来られ母校の教頭先生より父兄会で疎開児の学校生活の様子を報告してくれたと母が感謝していた。私は六年生であったので七か月の学童疎開経験をもって、昭和二十年三月に国民学校を慌ただしく卒業した。校庭で校長の挨拶があったが、卒業証書はない。

追記一

昭和二十年二月上旬のある夕刻、長兄（当時十八才）が疎開先を訪れた。私と挨拶し、すぐに職員室で先生と何やら話をした後、私に、お父さんの具合が良くないからすぐ東京に戻ろう、ということで、職員室で急いで食事を済ませ、兄と二人で東京に向かった。東北線の列車内は戦時中のため灯火管制下で人の顔も良く見えない。車内は立ち席でかなり込んでおり軍人も多数乗っていた。兄はほとんど口をきかない。上野で乗り換えて浜松町で下車。東京の街も灯火管制下でまっくらである。兄について黙々と芝公園の家路を急いだ。久し振りの懐かしい我が家の門に入り、玄関の引き戸を開けた。そこには葬儀道具が長く横たわっていた。私はすべてを知った。父はもういないのだということを……。空襲がひどくなると、自家防空壕では危険なため、病床の父は、雨の日でも芝公園の防空壕に度々避難し、栄養の不足、仕事の苦労等もあって亡くなったのである。これも、銃後における戦争の被害者の一人なのだ。

追記二

昭和二十年の三月国民学校を卒業し、四月に区内の私立中

学に入学した。戦時中なのでまだ軍事教練の時間があった。ある日、校庭で軍事教練を受けていると、警戒警報なしに空襲警報がけたたましく鳴り響いた。途端に芝公園の高射砲がドン、ドンと鳴りだした。空を見ると、芝公園の森に米軍の艦載機が飛来し、P51であろうか、無差別に機銃掃射を始めた。機音が遠くなったと思うと反転してまた近くに飛来して射撃する。配属将校は直ちに授業を止め、すぐ帰れ、と生徒に指示をした。私は怖い思いで、木陰づたいに家路を急いだ。今でも曲技飛行の小型機が低空を飛び反転すると、この日のことを思い出し良い気持ちがしない。

追記三

昭和二十年五月二十五日、この晩に二階建て二軒長屋の我が家は空襲で焼け落ちた。一キロほど南の仲門前町方向が赤い炎で包まれている。不動銀行あたりも赤く染まっている。今日は助からないぞ、家族は皆そう思った。もう父はいない、母と四人の兄弟は防空壕内に入れられる物は入れて土を被せた。幸い自転車一台とリヤカーがあった。これに大事な物を積んだ。今日は建物疎開で住宅を引き倒し、燃料とする木材を縁の下にたくさん押し込んである。類焼で焼けたら燃えでがあるぞと兄弟で冗談を言いながら避難の支度を急いだ。ふと表通りを見ると火の粉の加勢が六、七メートルの高さまで上がっており、通り向こうの建物は最早何も見えない。周囲の気温は上がり、熱くなってきた。兄たちはまだ家の中から物を持ち出している。母が急がないと逃げられなくなるよ、と叫んで子供たちを急がせる。そのうちに火の粉で門柱に火が付いた。もう逃げないと命がない。親子五人は母に尻を叩かれるようにして、早足で御成門を抜けて坂を上がり、神谷町先の鞆絵国民学校の体育館に避難した。そこで支給された玄米のおにぎりの美味しかったこと……。夜が明けて、自宅に戻ると見事なほど、はるか彼方まで焼け野原となっていた。

この手紙は集団疎開している私の許に昭和十九年の十二月に私の長兄が寄こした手紙です。東京への大規模な空襲は昭和二十年に入ってからでしたが、その前年昭和十九年の晩秋の頃から既に小規模ながら連日のように空襲があったのです。この手紙にはその頃の空襲の様子、とりわけ芝の神明神社近傍が焼かれた際の住民の行動について詳しく書かれていますので添付しました（氏名はすべて略記してあります）。

（手紙本文）

Yちゃん元気でやって居るかい。今日（十四日）そちらから手紙が着いたよ六日かかるんだね。そちらは大分寒いようだね。こちらも昨朝雪が降り少し積もったよ。お父さんはま

だ寝て居るが大分良いようだ。そちらはのん気で良いなあ。こちらは毎日敵機が真上まで来るよ。では最近の空襲の様子を少し詳しくお知らせしよう（この事はあまり言ひふらさないようにしろよ特に田舎の人や子供にね）。……十一月廿日の夜中午前一時頃警戒警報に續いて空襲警報が鳴った。皆（隣組員や警防團員等、以下同じ）緊張していざの場合にそなへた。敵機が頭上を飛ぶ毎に待避信号の鐘が鳴ると同時にドンバリン　ドンドンドン　ドスンドスンドスンと高射砲がものすごい音を立ててパッパッパッと火花は上空に上る。ブーンブーンブーンと無気味な爆音を立てて敵機が頭上を通る。突然東北（銀座の方）の空が赤くなった。焼夷弾を落としたものらしい。だんだん空が赤くなる。落ちた所は後で解ったのだが日本橋方面神田方面だ（家の店の露路にも一個落ちたそうだがすぐ消したそうだ）空が赤くなって居るのを見ると落ちた方の人は大変だなあ気の毒だなどと思ふ。間もなく解除になった。まだ赤いしかしあまり寒く又ねむいので家の店の安否を思ひつつ床に入った。……突然遠くでサイレンが鳴って居るのを聞いた。まだ夢うつつだするとこんどは近く愛宕山（らしい）で鳴り出した。ハッとして飛び起きて用意をすまし庭へ出たとたん空襲警報が出た。すぐに待避信号が鳴った。（敵は房総方面よりやって来たのだ）僕とKとお母さんは待避壕へ飛び込んだ（お父さんは寒いから入らなかった）一分位じっとして居ると前の様に高射砲が鳴り出した。ドンバリンドンバリン　ドスンドスン　ドンドン　バリンバリンパッパッパッ破裂した時の光が壕内にもれて来る（壕にはエン蓋が有る）とシュルシュルシュルサーサーサーと云ふ無気味な音がした。俺は前に友達の家のそばに爆弾が落ちたときそんな音がしたと聞いたので「アレハ爆弾が落ちる音だよ」とKとお母さんに言って耳と目をふさいで息をもつかずじっとして居た。間もなく敵の爆音が遠ざかった。四時半頃、どこかで「焼夷弾落下」と云ふ声がした。ハッと我にかへって壕から出るとあたり一面煙だらけだ。どこかでKさんの小父さんが「近くに落ちたから二階を見てください」とどなって居る。二階を見たが何ともない。神明様の方から火の手が上がった。バケツを持って前の道路に出る　煙で息がつまりそうだ。こんどは大東出版社の方へ火の手が上がった。……消防自動車が来た。Yの家の裏が燃え出した。……消防車が水を出して消火にかかった。手押ポンプも来る。……しかし火は大きくなった。……家（僕等の家以下同）は風下だ火はだんだん近づいて来る。……必死で家に水をかける。……Uさんの家が燃えだした。Iさん（お隣り）の小父さんは表の屋根に上って水をかけて居る。……僕も門の上へ上って小父さんに水をわたしてやった。……防火用水の水はとっくに無くなって、風呂桶の水も無くなってきた。……水道は出ない…

…水が不足だ。お寺の井戸からくんで来ても来ても足らない。……家へ水をかけると少したつと湯気を立てて乾いてしまふ。「お父さん危険だから芝公園へ逃げて下さい」と家の中へ向かって俺はどなった。……必死の火と人間との戦いは約二時間も続いた。火は下火になった。気が付くと神明様の方はまだ盛んに燃えて居る。消防車は此方への注水を止めて、神明の方へ水をかけはじめた。……消防車の水が来なくなったので、僕等は手押しポンプを代わる代わる押し、バケツを使ってのこり火を消した。なかなか消えない。……神明様の方も下火になった。……やっと火は消えたが（七時頃）まだ煙がもうもうと上がって居る。僕の家は無事だった。家へ入ると電燈は付かずお父さんの姿が見えない。どこへ避難したのかわからない。僕（長兄）とK（三兄）と二人で傘を持って（雨が降っていた）さがしに行った。……帰り路にお父さんに會った。東照宮の方へ避難したそうだ。家へかへって雨かっぱを脱ぐとズボンや猿股まですっかりぬれて居た。

それからと云ふものは毎夜八時頃又は明方二時・三時・五時頃必ず敵機はやって来る。昼は二日又は三日おきにやって来る。夜は数機（一～三機）。昼間は少数機又は編隊（十機内外）でやって来るから安心して寝て居られない。此の様な緊迫した時勢でお父さんも寝て居るのでお母さんは今年中にはそちらへ面會には行かれそうもない。しかし僕は廿日過ぎに行かれるかも知れない（お母さんが行かれなくてがっかりするだらうが）から持って来てもらひ度いもの（しかし買い物にうっかり出ると空襲になるからなるべく家にあるもの）を書いてすぐ送ってくれ、その時空襲時のもっと詳しい話をしてやらう。今夜も空襲があるだらう早く寝ないと夜中に起こされた時ねむくて仕様がないもうねるよ。では身体を大切に。安心して勉強しなさい。

さようなら

十二月十四日夜九時　　K（長兄）

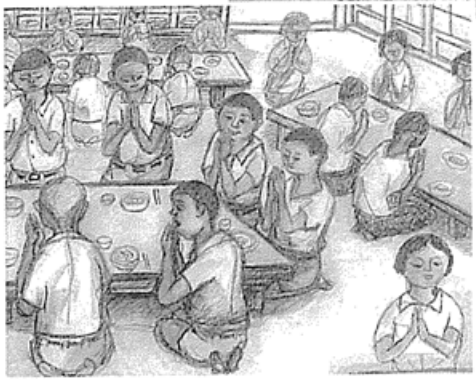
母からの手紙（差出日不明）

Yちゃん今日はお手紙有難う。とても寒いそうですね。風邪をひかぬやう気をつけて下さい。足袋もそのうち送りますが東京も毎日空襲で中々ひまがありません。めぐみ市場も空襲で焼けてしまったからふりかけも送る事が出来ませんが何かお薬を送りませう。今食べるものが充分ないからよく寝て體を休養させ疲らせないやうにして下さい。毎日よく疲れると寝汗をかく事がありますから、毎ど寝汗が出るやうでしたら学校を休んで寝ていて下さい。熱はないやうですか咳は出ませんか。ママがみてあげられないから自分で気をつけて少し體の調子がへんだと思ったら先生に申して體温器で熱をはかってみて下さい。少しでも熱がある時は寝ていて早く治し

なさい　無理をするとお父さんのやうに中々治らなくなりますから充分要心して下さい。しもやけもばいきんが入るといけないからよくほうたいをしておいて下さい。お腹を悪くするのが一番いけないからよく気をつけて梅肉エキスでもものんでおきなさい。お兄さんが面会に行くかも知れませんが、どうぞ體丈はよくよく注意して大切にして下さい。では又

東京の空を護る母より

Y殿



小島　義一　画

第一部（手記・空襲）

空襲体験

鈴木　久代子

無謀にも戦争に突入してしまった、昭和も十九年となり、銃後の社会で確実に歩みを固めている人達が、軍に呼ばれる事が多くなり、人々が、日本の行く先に不安を抱き始めた頃、私の夫にも「赤紙」が来た。控え目ながらのニュースにも、日本の劣勢が感じられる動きになっていた事もあって、ショックを受けたものの、私は、当時住んでいた新宿区西落合の家を片付けて、夫の入隊した水戸市に向かっていた。夫は、水戸三十七連隊の中隊長という役を、いただいたので、当番の兵隊さんが来て、何かと生活出来るよう、手伝いをしてくれた。

間もなく、東京の上空へも敵機の侵入が始まり、本格的空襲へと突入するだろう事は、報じていた。それでもまだ、私たちは、空襲とはどんなものか？は、完全には、認識しなかった。その頃には、流石に軍隊では「今日は、何処が空襲のお見舞いを受ける」かは、分かっていたようだ。少し"ゆとり"を取り戻した夫は、このしっとりと美しい水戸の風景を、卒業

後も私を可愛がって下さっている、母校”御茶ノ水“の佐伯教授に、見せてあげたいと思ってくれて、七月一日をその日と定め、先生は、前日の警戒警報中を、水戸まで来て下さった。ところが、その夕方、二、三人の当番の兵隊さんが、「実は今夜、この水戸が襲撃されるんです」と言って、家財を水戸より少し離れた地区まで、運び出しますと、来てくれた。ガランドウになった部屋で、そんな事とは知らず、今日呼びよせてしまった、疎開させていた私達の幼い子も交え、トロトロと、まどろんだ夜中十二時過ぎ、もの凄い爆音と共に、「敵機来襲」の、悲鳴にも似た叫び声に、目を覚まし飛び起きるや、もうB29は頭上にいた。私は、すぐ一才半の下の児の頭に、大きすぎる鉄兜をのせ、泊まりこみで、警戒に当たってくれていた兵隊さんに託し、三才の長女の手をひき、水戸市見学の為に、折角「来戸」された教授は、東京駒込での、先輩被爆者としての経験を生かした、いろいろの注意心得を聞かせて下さり、それを聞きながら、とり急ぎ必需品を身にくゝり付け、兵隊さんの案内で、連兵場の壕を目ざして歩き出した。あたりは、照明弾で眩しいほど。轟音が、かなり低空で頭上をよぎる際は、とても立ってはいられず、生まれて始めての匍匐（ほふく）前進になり、文字通りの「這ふ這ふの体」（ほうほうのてい）で、壕に辿り着いた。軍が、叡智をこらして造った、大きなペトン式の壕には、何人かの、先住者がいたようだったが、私達も、一隅を確保して落ち着き、取り敢えず、心臓の「バクバク」を鎮める事が出来た。やや落ち着いて、壕の小さな窓からのぞいてみると、大きな錬兵場も真昼間の明るさ、編隊米機は、市内中心地を目ざして悠然と飛行、あとで聞いた事だが、市民の皆が、逃げ場ときめていた千波湖のあたりには、坪あたり二～三発と、まさに絨毯爆撃を受け、此処で多数の市民が、犠牲になった。

その時だった。轟音をかき消すような男性の歌声が、日本人なら誰でも郷愁を覚える”荒城の月“を唄い出した。壕の入口に仁王立ちになり、「中の人達のすべては、私が守る」といった恰好で、立ちはだかった一人の青年将校。眉目秀麗の彼は、片手は壕に、片手は日本刀で造られた軍刀に掛けて、市街地のすべてを焼き尽さんと炎える猛火を反映して、朱に染まった天空を仰ぎ、敵機も聞けとばかり研ぎすまされたテノールで、力一杯唄いあげていた。その声は、何処かの音大のリサイタルかと思わせるほど、一分の狂いもなく明るく、恐怖に戦く壕の中に一瞬の安堵を送りこんでくれた。やがて、市内を焼き尽くし、多大な痛手を与え、使命を果たし終えた敵機が、どこかに消えるまで、その声は、あたりに響いていた。真っ赤になった市街地の空を目にした私は、放心状態ながら「隊長の家は、無事でした」と、伝令さんが叫んでくれた声に、やっと我に帰り、白々と明けゆく道を、今度は、立

って歩いて疲労困憊の姿で帰った。先生には、一日違いで、昔の水戸のたゞずまいを、見て頂く事もなく、お帰りいただいた。あの折のテノールの主は、誰だったのか、遂に知る折もなく、程なく私達も、瓦礫の山と化した水戸を後にしたのであるが、その後、六十年の月日がたっても、その声は、私の耳朶の底にへばりついて消えないのである。日本軍の終末を見守り、忠実に、留守隊を守った夫にも、その事を取り立てて話す折りもなく、その後、夫とも、幽明境を異にしてしまった今では、どうにも手だてなく、心にかかったままの状態である。

それにしても、あの夜の狂ったような、すさまじい爆音、対照的に、静かに朗々と唄われたテノール。はしなくも、身近に体験してしまった戦争を……人間が懸命に築き上げた文化を、命を、一瞬にして無にしてしまう核爆弾というものを、一寸でも恰好いいと思う世代の人々には、否という事、戦争は、絶対に罪悪であるという事を、語りついでゆきたいと思っている私なのです。

港区　レプリカ

港区　レプリカ

第一部　（手記・空襲）

東京大空襲

長田　延満

（昭和二〇年三月十日午前〇時五分頃）ラジオから、「大本営発表、敵機は東方海上に遁走中」と、ここの所の毎晩同じ放送が終わり、家の防空壕から出て、ゲートル巻きのまま、一階の座敷へ横になった途端、ドカァーンと大地震の様な揺れと共に、灯火管制で真っ暗な闇が真昼間の明るさに照らし出され、前方四・五軒先の家（向川さん？）が炎に包まれていた。全くの一瞬、ドラム缶の防火用水の水をバケツでくみ外に出たが、熱風で近寄るどころではなく、前日、赤ん坊の妹をおんぶして疎開先へ行く母から、万一の時はこれだけは持って行ってくれと言われていた父の鞄だけを持って、寄宿していた従兄弟と直ぐ逃げた。二～三百メートル位の四方のあちこちに炎が上がっており、火の気の無い方へと行ったのが茅場公園（江東橋三丁目）で、既に大勢の人が居り、防空壕はどこも満員だった。その間十分足らず位ではなかったか、公園を取り巻く住宅は炎に包まれた。その猛烈な炎が風を呼び暴風となった。あたり一面、火の粉で、火の海となる。私は公園のコンクリート製のトイレの軒先に立っていたが、目の前に、焼夷弾（長さ一メートル余り、直径十センチメートル位、六角？）が数発落ちたが、不発で助かった。トイレに

近づいてきた赤ん坊を背負った親子が、髪の毛に火がつき目の前で倒れる。絶叫したであろうが火炎の轟音で聞こえなかった。どの位の時間か分からないが、周りの木々にも火がつき、なんとか防空壕へ入りたいと、そばへ行ったが、防空壕の木部に引火したのか中の人は死んでいた。それから、どこをどう逃げ回ったか、定かでないが、明け方前、錦糸公園にたどりついた。

そこへ行くまで、たくさんの焼死体を乗り越えて着いたが、そこに居る大勢の人はみんな生きていた。ああ、助かったと思った。着物が焦げていないのでそう思ったが、側で倒れている人は、機銃掃射で殺されていることが直ぐ分かった。公園と空一面が照明弾に照らし出され、人々が映し出され、B29が超低空で、機銃掃射をしてきた。操縦士が笑いながら乱射している姿が、今も瞼に浮かぶ。私は思わず拳を振り上げ、”今にみていろ、きっと仇をとるぞ“とさけんだ。

朝になり、全てのものが燃えつくされ、見渡す限り焼け野原となった。従兄弟とそこで偶然に会い、母の実家（台東区下谷金杉）へ行った。私の目は火の粉が入って瞼がふくらみ半目しか開けられず、手を引いてもらいながら歩いた。千葉街道（現京葉道路）の路面電車の軌道を頼りに両国橋を渡ったが、そこへ行くまでは、焼死体をまたぎまたぎの連続だった。

漸く着いた母の実家も焼失しており、家族が呆然としていて、お互いになす術もなく別れた。その時他の親類六軒も皆被災した様子であることを知ったので、父の実家の”鶴ヶ峰“（現・相鉄、神奈川県旭区）へ行く、確か品川だったか、横浜迄東海道列車に乗れた。すし詰めで辛うじて入口に座っていったが、疲れて居眠り、走る列車から転落するところを、傍にいた人が襟首をつかんで引き上げてくれて命拾いをした。疎開の荷物を預けていた分家に着いたのは、夜八時頃だった。出迎えた母の話では、東京の空が明け方迄真っ赤だったとの事、眠れなかった様だった。母は、前日にここに来ていたので助かった。父はその一ヶ月程前に事故で大怪我をして新宿の鉄道病院に入院しており、弟は、学童疎開していたので、家族五人命だけはたすかった。時に、私は十三才中二でした。

この東京大空襲では、B29、三百三十機による焼夷爆弾攻撃（一説によると、ガソリンを撒いた）で、一晩で死者七万二千四百三十九人、負傷者二万六百七十九人、計九万三千百十八人、全焼二十五万六千十戸。その悲惨さは、原爆被災と変わりないと思っている。

第一部　（手記・空襲）

「東京大空襲について」御成門中学校三年生への話

廣畑　美恵

おはようございます。今から七十三年前私は桜田小学校の一年生でした。新橋駅の直ぐ近くの学校です。十八才（今の高等学校卒業の年です）の時、先生になる学校を卒業して六年生の担任になりました。埼玉県の川口市です。そこで六年、高等科一年二年と三年間そのクラスを持ちました。そして、昭和十六年十二月には太平洋戦争が始まりました。父は心配して、先生を辞めるように進められ退職しました。四月から八月頃までお華や、お茶の稽古でなく真心影流のなぎなたの道場に通っていました。五月頃父の友人が家にやって来て、戦争で学校の先生が、出征してしまうので、校長先生が子供を受け持っているから美恵さんに先生になって欲しいと言ってきました。南桜小の校長先生から是非にと乞われ、十月から五年生の男女組を受け持つ事になりました。家から歩いて十五分くらいの所にある学校で、やっぱり先生を再びやれるので一生懸命でした。又、五年男子組の先生が出征したので、男子組、女子組の二組に分け、男子の担任になりました。

三月には戦争が激しく東京も空襲される事は避けられないと考えられ縁故疎開が勧められました。親戚や知り合いのある人はというすすめの父母会が何回も開かれました。いよいよ子供たちの命だけは危険にさらしたくないという国の大方針によって、昭和十九年八月に、港区では学童集団疎開が実施されることになりました。三年から六年まで親と離れて先生や保母さんのもとで集団生活をする事になり、御成門小に一緒になった六校は栃木県鬼怒川、川治、塩原、那須の温泉地に行く事になりました。六年生は、昭和二十年二月の末に卒業式と中学入試のため帰京致しました。六年生の帰った後には二年生や希望者が入って来ました。忘れられない事は、あの三月九日の深夜から十日の朝にかけての東京大空襲のことです。私は鬼怒川の集団疎開から六年生を連れて卒業と進学の指導の為に帰京してきていました。

「大空襲の日」、真っ暗な闇の中に、前方の一角が明るく、巨大なカラスのような姿がくっきり浮かび上がる。あっという間に飛び去り、又、一機次々と眼に焼き付けられる瞬間が続く。三月十日の夜明けの空襲警報で街中が闇、防空壕が無いので家の中で息を潜めていたが、表がパット明るくなったので火事だと父母と共に飛び出し、家の前に立って見まわしたところ芝浦方面から一機ずつ飛んでいく方向を見ると、赤れんが通りの道に、火のついたろうそくが何本もずらりと並んでいるように焼夷弾が落とされ、火の炎が駆け回っている。

私の家は、愛宕警察の並びの道に面した所であった。家の直ぐ近くには爆撃が無かったので、じっと金縛りにあったように立ちすくんでいました。気がつくと芝公園から逃げてきたという人が隣に二人ほど。一人の方はご飯の入ったおひつを抱えて、もう一人の方はオーバーコートにくるまり、お隣の人に声をかけたが出ていらっしゃらなかった。もしかしたら?と心配そうに話をしていました。

すぐそばに桜川小、母校桜田小、現在勤務の南桜小とあり、子供の家の事、小学校の同級生の家の周囲が火に煽られている。心配でたまらない。空襲が解除されたと同時に駆け足で、桜川、周りは焼けていない。桜田小へ行く途中焼け崩れた家並み、友人の家の前を通ったが、誰も人影を見る事は出来ませんでした。日比谷通りを越して南桜地区は無事であった。学校に入って職員室にいた宿直の先生と顔を合わせ、南桜の学校の子供たちの家はよかったと安心して腰を下ろした。卒業させられる。三月九日、十日の東京大空襲を目の当たりに見た事は、今も眼底に焼き付いている。そして六年生は、三月十日には家は焼ける事は免れましたが、その後五月二十五日～二十七日にかけ、大半焼け出され、あちらこちらと避難したのですが、その事は鬼怒川に再度出かけ、一年生を受け持っていたのです。折角疎開したのに卒業して恐ろしい体験をしたのでしょう。私は疎開地で、二十四時間目の前にいる子供たちの先生であり親代わりである事に追われていました。当時一年の加藤君という子が、父の疎開の時の日記をしまってくれていたのでと見せてくれました。これです。古く黒ずんでしまった藁半紙にカタカナできちんと一日の出来事が書かれていました。

六月二十三日土ハレノチアメ　　六十二ゴウシツヘヤ
加藤順庚
ケフオヒルスギ　藤ワラノエキマデキャウソウシマシタ。ボクタチガブンキウヂウノマエノトコマデイツタラアメガフッタカラヤメニナリマシタ　ソレカラケフオゾウスイデオイシカッタデス　ケフオヒルゴハンヲタベタラ　イキナリウチノ中デタイヒオシマシタ　ソイデ十五フングライタッタラタイヒカイヂョウニナリマシタ

裏を返してみると六年生の算数のテストの紙でした。物資がないし東京からも何も届かないので、日記を書くのにテスト用紙を使ったので、始めのうちは一枚一日、それが七月になると三日分位きっちりと書かれていました。一年生の一学期でこんなにきちんと書けたのかとびっくりしたり、ずいぶん感心しました。その時の人は今六十六才になります。私も長く生きてきたものです。大正十一年に生まれ、この間小学

校の先生を四十二年間やってきました。第一次世界大戦、日支事変、満州事変、太平洋戦争と小学生のうちから戦争の中でした。親や弟たちもみな生き残り、戦後の苦しい生活を生き抜いてきました。しかし、三月の東京の大空襲で十万人死亡、広島・長崎の原爆で亡くなられた方や、又傷つき家を焼かれてしまった方達、大変多くの方が戦争の被害にあわれた事を思うと胸が痛くなります。

私の主人は広島の人で、戦争中は応召で軍隊に入っていましたが、兄姉両親は原爆に遭い傷つきました。家の下敷きになった義姉、爆風で傷つき防空壕に横たわっていた兄、焼け跡の壊れた家を見つめた父母、広島の駅頭に二十一年八月七日に立ちました。それから子供を連れて、夏休み冬休み広島の父母のもとに行きましたが、原爆の話を聞く事はありませんでした。今は皆亡くなりました。主人の姉が一人いますが話をしてくれません。本当に生き残った事もつらかったのだと思います。

主人が広島で教えていた級の子で、男の子一人女の子一人が、やっと生きていたという事を知り悲しんでいましたのを思い出します。皆さんが修学旅行に行かれたというのでご覧になったことと思いますが、峠三吉の原爆詩集の始めに書かれている「ちちをかえせ　ははをかえせ　としよりをかえせ　こどもをかえせ　わたしをかえせ　わたしにつながる　にんげんをかえせ　にんげんの　にんげんのよのあるかぎり　くずれぬへいわを　へいわをかえせ」詩碑が建っています。峠さんは、被爆者で八年生きていた時に原爆の詩を書いていたのです。

（中略）

長い間、私の歩んだ八十三年の道をもとにお話をしました。三年生の先生方が私に話して欲しいと思ってくださったことにあたったかどうかわかりませんが、本当にありがとうございました。みなさんは幾多の災害を乗り越えて生きてきた人が、おじいさんであり、おばあさんであって、父や母で、その全力で廃墟の中から今の社会を築いてきた人達の子供です。どうぞこれからの良い社会づくりの大事な一人一人です。ありがとうございました。

廣畑美恵さん所有